2024年6月 馬渕祐太

船井情報科学振興財団 第2回ポスドク報告書

2023年10月からColumbia Universityでポスドクとして勤務している馬渕祐太です。ここ数ヶ月のポスドクの生活について報告させて頂きたいと思います。

1. 研究について

ポスドクを開始してから早半年以上が経過し、プロジェクトも定まって本格的に実験をするようになりました。とは言っても、大学院時代からモデル動物を大きく変更したこともあり、研究に必要な実験技術を他のラボメンバーから吸収している段階です。新しい実験手法を学んでいる段階では、教えてくれる人のスケジュールに合わせる必要があるため、なかなか自分のペースで実験を進めることができないこと、目に見えた研究の進捗がないことにややストレスを感じることはありますが、最初の1年の辛抱だと割り切って研究を進めています。分野の性質上Ph.D.と同様に5年程度(最近の流れではそれ以上)ポスドクをやるのが一般的であり、ポスドクは第二のPh.D.とも呼ばれるためまだ序盤という感じではあるのかもしれませんが、早く研究のペースを掴んでなるべく早くポスドクを終えることができたらいいなと思っています。

大学院で所属していた研究室も現在所属している研究室も2017年にできた割と新めの研究室ではありますが、先生の指導スタイルは大きく違います。コーネルの指導教官は研究方針や実験結果について話をしたい時にこちらからミーティングをセッティングすることが多く、自分の場合は1ヶ月か2ヶ月に一度適宜ミーティングをお願いしていました。ミーティング以外にも研究室内ですれ違ったときにカジュアルに実験の話をしてフィードバックをもらうことはあったものの、日常的に実験内容について細かく聞かれることはほとんどなく、自分のペースで研究を進めることができていました。一方今の研究室では、大学院生とポスドクは週に1回先生との30分のミーティングが組まれています。そのため1週間に何をやったのか、次の1週間で何をやる予定なのかを逐一報告する必要があります。ポスドクのインタビューの時に週1回ミーティングがあることはラボメンバーから聞いていて、研究の進捗を週単位で話し合えるのはむしろ良いくらいに思っていましたが、いざ自分で経験してみると細かく指示を出されるのが好きでないことに改めて気が付き、自分にとっては想像以上にストレスです。特にまだ実験手法を習得している段階だと、1週間でやったことは実験の練習ということも少なくないのですが、30分間は時間は確保されているので、実験の進捗や結果以外に何を話すかを毎週考えないといけないのがなかなか大変です。先生としては、こちらをプッシュするというよりは進捗を確認して何をすればいいのかわからずロストしてしまう人をなくすためのミーティングのようですが、プロジェクトがしっかり定まっている大

学院生やポスドクに週に1回進捗確認するのは頻度が高すぎるのではと感じています。新しい研究室のスタイルに順応するのは大変でストレスを感じることもありますが、研究に使用しているシカマウスは小柄で非常に可愛く、世話をしているととても癒されます。ややネガティブなことを書いてしまいましたが、自分の研究プロジェクトは非常に気に入っているので、成果が出るのが楽しみです。

現在はコロンビア大学内のポスドク用の奨学金を持っていて、2026年まではその奨学金から援助を受けられるのですが、大学からは外部の奨学金に申請するようにお願いされ、応募可能な奨学金に積極的に応募しています。海外出身のポスドクが申請できる奨学金の数はそれほど多くないですが、自分が所属しているコロンビアのZuckerman Instituteには奨学金応募専門の支援チームがあり、自分が申請可能な奨学金をリストアップしてくれ、さらに添削とコメントをしてくれるというとても優れたシステムがあるので、こちらをうまく利用しています。ポスドク用の奨学金の多くは応募時期がPh.D.取得後1年や2年以内に限定されているので、1年目のポスドクの多くは多かれ少なかれ奨学金の申請に労力を使います。決して得意とは言えませんが、ライティングは嫌いではないので、プロポーザルを書く作業は研究計画を整理するための時間だと思って活用しています。

2. 生活について

ニューヨークでの生活にも徐々に慣れてきて、生活リズムも安定してきました。ニューヨークに住ん でいると、大学院時代とは異なり、日本食が気軽に食べられたり(お金さえ出せば)、同じ研究分野の日 本人と交流したりできるメリットがあります。また、大学院や日本の友達が遊びに来たタイミングで気 軽に会うことができます。あと日本に帰国するときは直行便が取れます。直行便はやはり楽です。Ph.D. の6年間はイサカ空港からニューアーク空港で乗り換えて東京行きの飛行機に乗ることは多かったので すが、なぜかイサカ朝6時発の飛行機しか基本的に選択肢がなく、早朝にはウーバーのドライバーがいな いかつウーバーを予約手配するサービスが提供されていない田舎では、地元のタクシー会社を事前に予 約して、オンボロの車で空港まで送ってもらうしかありませんでした。それと比べると航空会社も空港 までの道のりもいろいろな選択肢があるのは便利です。一方で、ニューヨークは気温が高くなってくる と街中でも臭うところが多いほか、コロンビアはそれほど治安が良い場所には位置していないため、自 分にとっては決して居心地が良くないというのが本音です。綺麗で静かな田舎町のイサカが恋しくなっ たので、1年弱ぶりに遊びに行きました。George Washington Bridge Stationというニューヨークのアップタ ウンにあるバス停から片道4時間ほどです。イサカに住んでいた頃はバスでニューヨークに遊びに来たこ とは一度もなかったので、遊び目的でイサカ-ニューヨーク間をバス移動したのは初めてでしたが、バス で昼寝して少し動画を見ていればすぐ着いたので、今後もニューヨークの生活に疲れたら遊びに行くの はありだと思いました。イサカでの滞在中には、大学院時代の研究室を訪れて友達や先生方と再会した り、コーネルでPIとして勤務している日本人の方に会ったりしたほか、みんなでブルワリー(ビールの醸 造所)に行きイサカの自然を満喫することができました。一緒にジムに通っていたイサカの地元の友達と ジムに行ってから飲みに行くことができたのもとても良かったです。 また、FOS2023の久壽米木くんとも

お昼ご飯に行って、その後車でイサカ内のいろいろなところに連れて行ってもらいました。非常に感謝しています。特にPh.D.の後半は家、ジム、研究室を行き来するだけの生活で、イサカの自然の恩恵をあまり実感することがありませんでしたが、久しぶりに訪れてみると、大学のキャンパスも街並みも自然も非常に綺麗でいい場所だなと改めて感じました。

3. 最後に

最後になりますが、大学院留学だけでなく、ポスドク期間も引き続き手厚くサポートして下さる船井 情報科学振興財団には非常に感謝しております。今後ともお願いいたします。



コーネルの Clock Tower のふもとから見渡せる景色。